

追手門学院大学
上方文化笑学センター年報
第2号



2021年度

追手門学院大学 上方文化笑学センター

目 次

寄 稿

「何がオモロイねん!？」	大谷 邦郎	1
持続可能な笑い目標	浦 光博	5
東京遠征が学生達にもたらした役割期待	横田 修	9

研究報告

笑われる愚人 —『万葉集』巻十六の能登国の歌の成立について—	大谷 歩	13
-----------------------------------	------	----

活動報告

笑学カフェ開催 ～第3回の様子～	辰本 頼弘	23
公開講座へ出向いて ～「浪花千栄子と大阪」「ヒトと喜劇－笑い合う力」～	広瀬 依子	25
2021年度上方文化笑学センター活動記録		29
2021年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧		31
追手門学院大学上方文化笑学センター規程		

寄稿

「何がオモロイねん!？」

追手門学院大学上方文化笑学センター客員研究員 大谷 邦郎

「笑ってる人を見たら、それだけで腹立ちますもんね。何がオモロイねん!とってきます」

他の先生方の内容の濃い、かつ格式高いご寄稿の中で、毎度毎度申し訳ないのですが、「箸休め」的に、小生の拙文にもお目を通していただければ幸いです。今回のその内容も、小生がライフワークとして活動しております障害者支援の中で見聞きしたものです。今回は、去年一年間、ずっと追いつけてきた、ある女性にまつわるエピソードをご紹介します。冒頭の一言も、彼女の発言です。

その彼女の詳細を語る前に、まず「笑い」に関して最近小生が感じていることを、詳らかにしておきたいと思えます。「笑い」は「太陽」だと思います。しかし、何故なのでしょう?皆さん、太陽のイラストを描いてと言われると、太陽の表面に「ニコちゃん」マークのような、笑っている絵を描くのは。しかし実際太陽は、いわば“エネルギーの塊”。地球上に住む我々は、そのエネルギーから様々な恩恵を受けますが、悪さをしてくるときもある。例えば、過度な日光浴は、身体に悪い。また、太陽フレアと呼ばれる太陽の爆発現象で生まれた高いエネルギーを持つ電磁波は、地球上の電気機器に悪影響を与えられています。決して、良いことばかりではないのです。

そして「笑い」もそうだと思うのです。「笑い」の様々な面を知ることにより、「笑い」の適切な活用が出来ると思えます。ともすれば「笑い」の効能ばかりにスポットが当たる昨今、違った側面から「笑い」を見つめたい。それを小生は「笑いのダイバーシティの推進」と呼んでいます。皆様のご研究において、某かの参考に少しでもなればと思えますが…これっぽっちも参考にはならないかなあ。(汗)

ではここからは、去年一年間取材してきた彼女の事をご紹介します。

彼女の事を、ここではMIHOさんと呼ぶことにします。1988年6月生まれ。いわゆる“アラサー”です。その彼女は車いす利用者。赤ちゃんの時に患った小児ガンの影響により下半身が不自由で、物心ついた時から車いす生活を余儀なくされてきました。しかし、18歳の時に車いすダンスを始めます。車いすダンスとは、健常者と車いす利用者で行うダンスのこと。その歴史は意外と古く、第1次大戦や第2次大戦で傷ついた人々を中心に、車いす利用者同士がペアになって踊ったのが始まりとされ、英国発祥と言われています。その後、世界中に広がり、今では、日本でも、リハビリやレクリエーションとして取り入れられています。れっきとした競技でもあります。MIHOさんがその後通うことになる車いすダンス教室で、最初に言われた言葉が、「それだけ踊れたら凄いね!」、さらに「君、車いすの操作、上手いな!」とも。しかし、そんな誉め言葉で舞い上がる彼女ではありません。彼女は、こう思ったそうです。

「それは、ほぼ生まれてからずっと車いすに乗ってるんやからね」と。

とは言うものの、その後は、この車いすダンスの魅力にとりつかれ、めきめきと実をつけていき、2008年には、全日本車いすダンス選手権東京グランプリ・ラテン部門デュオスタイルで優勝。すなわち日本チャンピオンにまで上り詰めます。さらに、その後三連覇を達成するのです。



では、その翌年は、チャンピオンの座から陥落したのか、と言うとそうではありません。大会出場を止めたのです。その理由がこちら。

「三連覇して、対戦相手の中に、ライバルと呼べるようなチームが、当時は、もういなくて、その時点で、もう大会は、いいかな、と思って」

何とも、強気と言うか、少し生意気にも思える発言。けれど、そこに至るまでには、こんな思いがあったそうです。

「それまでは、特技もなく、自信も持っていなかったんです。でも、この車いすは別。まわりの友達には出来ないけれど、私には出来る。そんな車いすで出来ることを極めたいと思って。そう思ってやりだすと、どんどん楽しくなったんです」

しかし、彼女は、この車いすダンスから、その後、少し離れます。確かに「やり切った」感もあったのですが、もう一つ理由があります。それは、赤ちゃんの時に患った小児ガンの影響から背骨が湾曲している、いわゆる「側弯症」が原因でした。

彼女は、こう説明します。

「手術でなったと言うわけではなく、私になったのは神経に付いているガンなので、骨も弱らせていたって言うか、固定しても固定しても、どうしても曲がっていくみたいです。」

そして、こう続けました。

「左側に曲がっています。凄い角度で。中学三年生の時に一度、手術の話がありました。でも、その時には痛みは無かったし。私の背骨は上の方は真っ直ぐなんで、肺を圧迫するような二次障害も起きていないし。お医者さん曰く『こんなに背骨は曲がっているのに、まっすぐ座っている。逆に、この背骨をまっすぐにしたら、反対に斜めになるかも』となって、その時は手術をしなかったんです」

その手術とは？

「パズルのように背骨を一回外して、そして、並べ直して、真っ直ぐに、出来るだけ真っ直ぐにした状態で、ボルトで固めるんです」

なんと、確かにパズルを組み立てるかのよう。しかし、決して楽しくなどない。実に恐ろしい手術。でも結局、その手術をその後も受けることはなかったんですが…

「二十歳を越えてから、徐々に痛くなり、今は、もの凄く痛いです」

実際に、どれだけ痛いかと言うと…

「ズバーン!!ですかね。夜中、目覚める回数が増えましたね、痛くて。身体を向ける方向が、左しかなくて。仰向けは、痛い、うつ伏せも痛い。さらに、右を向いても、痛いんですよ」

そこで、出てきた言葉が…

「ムチャクチャ痛い時に、笑ってる人を見たら、それだけで腹立ちますもんね。何がオモロイねん!となってきます」

そうなんです。笑いも、やはり時と場所を選ぶのです。

とは言え、彼女が人一倍怒りっぽい、短気だと言うわけではありません。実は、このお話を伺ったのは、2021年の4月はじめのこと。しかし、その一年ほど前の2020年の5月に、人生二度目のガンが見つかり、摘出手術をしていたのです。少しセンシティブになっておられたのには、そうした背景もあったからだと思えます。ただ、笑っている人の姿を見るだけでも不快に思える場合があると言うことは、改めて、心に留めたいと思います。

さて、ここからは「笑い」のテーマから少し離れるのですが、MIHOさんのこの痛みは、実は大きな警告だったのです。彼女の二度目のガンは、小児ガンの再発ではなく、腎細胞ガン。MIHOさんは、こう説明してくれました。

「二つのガンには関連性はないようです。すなわち再発ではありません。ですから、私は（ガンに関しては）“終わった人間”だと思っていたので、もう一回“当事者”になるとは思ってもみなかったですね」

そのガンはリンパ節までも侵していると言う、いわゆるステージ3レベル。結局、手術で、腎臓の片方を失いました。もう一度書きますが、それは2020年の5月のこと。そして、その手術から一年も経たないうちに、背中から腰が痛くなっていた。彼女は、それは側彎症の影響だと思っていた。しかし、実は違っていたのです。二度目のガンが再発していたのです。それはまさに、この発言が出た直後、2021年4月後半のことでした。

緊急入院して検査をしてみると、ガンは、脊髄に転移していて、MIHOさんの背骨のちょうど曲がっている先端に“めりこんでいる”状態だと言う診断が下されたのです。しかし…

「手術は難しいと言われました。手術をすると、逆に悪くなる可能性がある。多分、神経をいじるからやと思いますけど。じゃあ、放射線治療かと思っていると、放射線も難しいと。と言うのも、私の背骨が曲がっているからなのか、放射線を、直接患部に当てるのが出来ない場所らしいんです。どうしても腸に当たってしまうって。だから、それも止めといた方がいいとなったんです」

この話を聞いたときには、小生も大きな衝撃を受けました。非常に危険な状態だと思えたからです。ところで、この取材を始めたのは、この時点から3か月遡ることの2021年の1月。そのキッカケは、MIHOさんのSNSに二度目のガンに罹患したことが報告され、さらに、こう投稿されていたからです。

「自分で言うのもなんですが、二度の痛って、こんな本出せるやん!って自分の人生に突っ込んでしまいました。でも文章を書くの嫌いやし、下手やから絶対無理やけど(笑)」

そこで、そんなMIHOさんに代わって、これまでの経緯や、今の様子を書き留めておいてあげようと言う軽い気持ちから取材を始めました。当然、回復していると思っていたから。それが、手術から一年も経たないうちに再発するとは。さらに、手術もダメ、放射線治療も難しいとなると…最悪の事態も頭をよぎります。結局、医師側が選択したのは化学療法でした。

「化学療法の中にも何種類かあるそうですが、その中で考えられた結果が、免疫チェックポイント阻害剤治療なんです」

免疫チェックポイント阻害剤治療、そう最新のがん治療薬・オプジーボを使った最先端治療により、MIHOさんは再びガンと闘うことになったのです。

その後、8か月ほどが経ったところで、この原稿を書いています。現時点では、そのオプジーボは、彼女に“合った”ようです。再発したガンは確実に小さくなった。ズバーンと言う背中痛みも消えました。2021年末に伺ったお話の内容はこちらです。

「先週の火曜日に、今年8回目となるオプジーボを打ってきました。毎回、このオプジーボを打つ時に血液検査をするんですけど、先生曰く『こんな順調に打ち続ける人は、あまりおらへん』って。順調とは言え、1回目後、肝臓の数値が跳ね上がる副作用が出て、一回は飛んでるけど。でも、『一回あかんかった時点で、普通はもうやれへん』って。けど、もう一回やったって言うのも珍しいし、そこから続けてるって、続けられてるっていうのも、『そうおらん!』っていう話で。なんか私は、この薬が、合ったみたいです。」

オプジーボの治療は、3週間から4週間に一回、点滴投与すると言うもの。抗がん剤治療では、よく髪の毛が抜けると言った副作用がありますが、この治療においては、そうした副作用は出ません。もちろん、他の副作用が出るケースはあり、MIHOさんも一度“肝臓の数値”が跳ね上がりましたが、その後は、際立った副作用はなく、髪の毛は抜けず、食欲もあり、年末には一泊で温泉旅行にも行けました。そこで、小生は、こう言ったのです。「良かったですね、ここまで元気になられて」と。するとMIHOさんは、間髪入れずにこう言い返しました。「そこなんです!」と。そして、こう続けられました。

「ちょっと前だけど、会社に顔出す機会があって、そこで会う人会う人がみな『おお、元気か?』とか『めっちゃ元気そうやね』とか『想像と違う』とか言う。私、結構ひねくれているんで、何?元氣やったらあかんの?元氣でゴメンネ!みたいな気分になるんですよ」

さらに…

「私、まだ(ガン)を持っているじゃないですか。心の底に不安を抱えているんで。治ったわけじゃないんで」

そうなんです。「お元気そうですね?」も、時に人を傷つける可能性があるんです。では、こうした場合は、何と声を掛ければいいのでしょうか?

「それは…また…それで…難しい!」

MIHOさんは、そう言って、微笑まれました。

やはり「笑い」は難しい。人を元気づける笑いや、勇気を与える笑いもある。しかし、一方で、人を傷つける笑いもある。さて、どれほど笑いの種類はあるのでしょうか?そうした様々な笑いを、シッカリ分類・分析をして、いつの日か、それを体系立てて解説してみたいと言う決意を、去年同様、さらに一昨年同様ここに表明して、この拙文を締めることにいたします。最後まで、お読みいただき、本当にありがとうございました。

寄稿

持続可能な笑い目標

追手門学院大学上方文化笑学センター所員・初等中等教育長 浦 光博

SDGs (Sustainable Developmental Goals: 持続可能な開発目標) は、SLGs (Sustainable Laughter Goals: 持続可能な笑い目標) でもある。いきなり何を言い出すのかといぶかる方もいるかもしれないが、冗談を言っているつもりはないし、奇を衒っているつもりもない。もちろん、SDGs を軽んじているつもりもない。SDGs の基本理念である「誰一人取り残さない」世界は、きっと誰もが笑顔で毎日過ごせる世界になる。つまり、SDGs の達成の先にきっとSLGs の達成もあるはず。つまり、誰もが毎日笑って過ごせる世界を目指すことこそが持続可能な開発目標なのだと言いたいのである。

孤立・孤独と SLGs

改めて説明するまでもないことだと思うが、SDGs とは 2015 年 9 月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された目標群のことである。17 の目標と 169 のターゲットから構成されていて、そこでは地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことが誓われている。

地球上の誰一人取り残さないとは、言い換えれば、孤立や孤独のない世界を目指すということであろう。この孤立・孤独と笑いとの関連については、私が 2020 年に行った分析結果が一つの示唆を与えてくれる。そこでは、孤独な人は孤独でない人と比較して日常生活で笑う経験が少ないことが示されていた。笑いは人間関係の潤滑油となり、また人から人へと笑いは伝播する。とすれば、孤立状態に陥り、心に孤独を抱える人ほど笑う経験が少なくなるだろうことは容易に想像できる。誰一人取り残さないことを基本理念とする SDGs は、地球上の誰もが笑って過ごせる世界を目指すことでもあるのである。

17 の目標の全てをここで説明する余裕はないが、代表的なものをいくつかあげて、持続可能な笑いとの関連を考えてみたい。

貧困、格差と SLGs

SDGs の目標 1【貧困】では「あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる」ことが謳われている。この貧困と笑いとの関連についても、私の 2020 年の調査で分析している。結果は、貧しい人は豊かな人よりも日常的に笑うことが少ないことを示していた。このことは、貧困の解決という目標の達成が SLGs の達成につながることを示唆している。

ただし、ここで言う貧困についてはそれを絶対的なものと捉えるか相対的なものと捉えるかの問題があることを指摘しておかなければならない。絶対的な貧困とはまさに人びとが持つ富の絶対値のことである。収入の全くない人は貧しいし、たとえば年収が何億円もある人は豊かである。このとき、収入のゼロの人は数億円の収入のある人よりも笑

うことが少ないことは想像に難くない。しかし、たとえば1億円の収入のある人の住む地域の平均年収が3億円だったとしたらどうだろう。この地域の中では1億円の収入のある人は相対的には貧しいということになる。とすれば、この人の笑顔はもしかしたら引きつったものになっているかもしれない。

さらに重要なことは、このような相対的な富の格差が固定されたものなのか否かである。いくら知恵を絞って工夫をしても、どんなに努力をしても富の格差を縮めたり、逆転できたりすることのない社会なのか、それとも知恵と工夫、努力次第で格差を縮め、逆転することさえ可能な社会なのか。前者の社会では人は希望を持たず、この絶望がさらに人びとの笑顔を奪うだろう。

こういった貧困や格差と関連するSDGSが目標8【経済成長と雇用】「包括的かつ持続可能な経済成長及びすべての人びとの完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する」である。包括的かつ持続可能な経済成長が実現できれば、格差の縮小が困難であったとしても、人びとは未来に向けて「今よりも少しでも豊かな生活ができる」という希望を持てるかもしれない。逆に言えば、社会全体としての経済成長が期待できず、かつその中で格差の是正も期待できない社会では、SLGsの達成は容易ではないだろう。同様に、目標10【不平等】「国内及び各国家間の不平等を是正する」の実現は格差是正につながり、貧しい人びとに希望と笑顔をもたらすことになるだろう。

しかしながら、2013年に発刊された「21世紀の資本」(トマ・ピケティ著)では、資本主義は必然的に格差を拡大させることが主張されている。これが事実であるとすれば、少なくとも現状の資本主義体制の中でSLGsを達成できるのは、ごく限られた豊かな人びとだけになる可能性もある。

教育とSLGs

このような格差の是正は教育によって可能であるという意見があるかもしれない。目標4【教育】では「全ての人に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」ことが謳われている。確かに、包括的で公正な質の高い教育を全ての人々が等しく受けることができれば、それが雇用につながり、経済格差・希望格差の解消につながりながら、人びとに笑顔をもたらすことになるだろう。

しかし、最近の若者言葉である「親ガチャ」が示唆し、マイケル・サンデルがその著書「実力も運のうち」(2021年)で主張しているように、現代社会では生まれ育った環境によって受けることのできる教育の質が左右されることも少なくない。資本主義体制下では格差は拡大する一方であり、豊かな家庭で育った者ほど質の高い教育を受けることができるのであれば、SDGsならびにSLGsの達成に向けた教育のあり方について抜本的な制度改革が必要であると言えるだろう。

新型コロナウイルス感染症とSLGs

以上に述べてきた孤立・孤独や格差、教育と笑いと関連は、新型コロナウイルス感染症の拡大(コロナ禍)によってさらに複雑なものになってきている。密を避けるための対面的な接触の減少は、これまで孤立しがちであった人びとをさらなる孤立へと追いやることになった。それを解消することが期待されたインターネット空間でのコミュニケーションは、デジタルデバイドを拡大させることになり、持てる者と持たざる者との経済格差や教育格差をさらに拡大させている。またSNSでのコミュニケーションはエコー・チャンバー現象を通じて社会の分断を促進することにもなった。

このようなことを踏まえると、目標3【保健】「あらゆる年齢の全ての人びとの健康的な生活を確保し、福祉を促

進する」の持つ意義は極めて大きい。健康であることは他者との交流や生産的な経済活動の基盤となるだろうし、また他者との交流や生産的な経済活動を行おうとする姿勢が健康の維持促進に寄与するとも言える。全ての人びとの健康的な生活を確保することは SLGs 達成に向けての出発点と言えるかもしれない。

寄稿

東京遠征が学生達にもたらした役割期待

追手門学院大学上方文化笑学センター所員・社会学部 横田 修

ケラリーノ・サンドロヴィッチ氏の戯曲『ウチハソバヤジャナイ』（1995、ペヨトル工房）は、氏がまだ劇団健康で活動していた頃の作品である。ケラリーノ・ナンセンスの金字塔と言われる本作はいくつもの物語が絡み合っているが、その一つに間違い電話から始まるエピソードがある。ある日、夫婦の家に一本の電話が入った。妻は「ウチはソバ屋じゃありません」と答えるが、ジャンジャン電話が掛かってくるうちに、気がつけば妻はソバ打ちの準備を始めて出前に勤しむようになるのだ。

さて、ある種の役割期待（間違い電話）に答えるように、やりたくもない行為を始める（ソバ屋を始める）なんて、そんなこと現実にあるのだろうかと考えていたら、数年前に似たような状況を目撃したことを思い出した。舞台となるのは私が顧問を務めるSTEPだ。STEPとは、追手門学院大学社会学部の舞台表現プロジェクト（STage Expression Project）の略称である。学生とプロのアーティストがしっかりと手を組み、一般の観客の鑑賞に堪えうる舞台芸術作品（主に演劇）を創作する。『行動して学び、学びながら行動する』スタイルを身につける追手門学院大学が推進するWIL PROGRAMの一つであり、全学部の学生が参加可能である。専門的な活動を通して学生達は自身の興味・関心を探るのだ。2016年9月より活動を始め今年で6年目となる。

とはいえ、そもそも「役を演じる」とは役割期待に答える役割演技そのものである。つまり演劇とは役割演技のカタマリのような表現行為であるのだから、何を改まると言われたらその通りでだ。しかし今回紹介するのは、少々異なる角度からやってきた役割期待についてである。

今から3年前（2019年）のSTEPは、秋の合同学園祭にて『夏至の夜の夢』（脚色・演出＝加藤桃佳（社会学部三回生*当時／原作＝W.シェイクスピア／翻訳＝河合祥一郎『新訳 夏の夜の夢』（角川文庫））を上演し、翌月には同作品を東京の舞台に上げた。「八王子学生演劇祭2019」に学生自ら応募して目出度く選考を通ったのである。以下、出演申込書に学生が書いた演出プランを引用する。ちなみにこの年の「八王子学生演劇祭」は課題戯曲から演目を選ぶ形式を取っていた。『夏の夜の夢』も課題戯曲の一遍である。

戯曲名・夏の夜の夢

現在女子大生である私にとって、堅苦しく難しい印象が強かったシェイクスピアの戯曲ですが、喜劇『夏の夜の夢』は女子の心をくすぐる愛に満ちていて、大変興味をそそられました。そこで、この課題戯曲をベースにして、高校生ほど純粋ではなく、ましてや大人ほど現実的でもない、女子大生の妄想に溢れた愛を表現したいと考えました。

演出プランと致しましては、私が『夏の夜の夢』で一番好きなシーンは最後の劇中劇です。恋愛の物語を男子

目線で作っているのですが、その“しょうもない”感じがばかばかしくて面白いからです。

そこで今作では、思い切ってこの劇中劇とその創作過程に焦点を絞り、その内容を「ピラマスとシスピー（著者注・「夏の夜の夢」の中で演じられる劇中劇のタイトル）」から「ハーミアたち4人の若者のカオスな恋愛物語」に書き直すことで、大学生のとびっきりリアルな恋愛模様を描きます。

演出 加藤 桃佳

今読み返しても大変面白そうな内容である。作・演出を担当した学生はシェイクスピア作品を読み込み夏休み全部を使って脚本を書いた。学生達はその脚本を元に、約4ヶ月もの間、舞台創作と本番の日々を過ごしたのである。稽古開始は9月初旬であった。

さて、11月上旬に合同学園祭の本番を終えた学生達は次（東京公演）の準備に入る。同じ演目ではあるが会場の作りが異なるため演出を変える必要があったのだ。大阪公演の会場は追手門学院大学・総持寺キャンパス内、普段は図書館であるアラムナイライブラリー（写真1）。観客は舞台を囲む三箇所の階段に腰掛けて観劇した。対して東京のいちようホール・小ホールはプロセニウム形式の劇場である（写真2）。同じ会場で複数の団体が続けて発表するフェスティバルの最中に、舞台三方へ仮設客席用の階段を組むことは不可能だった。ということはつまり、視線の低



写真1 アラムナイライブラリー（大阪府茨木市）



写真2 いちようホール（東京都八王子市）

い観客にも舞台が見えるように作品を作り直さなくてはいけない。これが地味に大変な作業なのである。もちろん、より良い作品にするために稽古を重ねる必要もあった。学園祭での発表は両日とも満員御礼でお帰り頂くお客様もいる程の盛況ぶりであった。しかし、演劇をあまり観たことのないお客様も多かった。東京の観客はそうではない。演劇が好きでなければ観に来ないであろう。身内の観客もいないのだ。

話はここからである。12月に入り稽古も大詰めを迎えた頃、一人の学生が言った。「このままでいいのかな?」。先にも触れたが東京の観客は誰も私たちのことを知らない。八王子学生演劇フェスティバル2019に関西から参加するのはSTEPだけであった。「何かもっと、やれることはないか?」。彼らが考えた末に出した答えは、「取りあえず新喜劇やっとか?」であった。

『夏の夜の夢』は喜劇である。笑える場所が増えるのは良い。今回学生達が創った『夏至の夜の夢』は、河合祥一郎氏が翻訳したシェイクスピアの台詞をベースとしたシーンと、現代の大学生の日常が交錯する構造になっている。現代劇のシーンで出演する俳優達は台詞を自分の日常の言葉に変換して喋っていた。つまり標準語で書いている台詞を関西弁に変換しているのである。しかしシェイクスピアの劇世界は決して新喜劇の世界観ではないし、関西の大学生の日常だって決して新喜劇ではない。「大学生のとびっきりリアルな恋愛模様」と新喜劇の相性は正直良いとは言えなかった。関西を（勝手に）代表して出向くからには、お笑いの一つも噛まないとダメだと考えたのかもしれない。しかしオリジナリティーという観点からも新喜劇である必要性などなかったはずだ。

にもかかわらず、学生達は一生懸命、真面目な顔で全員がひっくり返るシーンの練習を始めたのである。監修として立ち会う専門家の私が止めても無駄だった。むしろ途中から私も面白くなってきて注文をつけたりしていた。東京公演後のトーク・セッションで、総合ディレクターである演出家の中込遊里氏（鮭スペアレ）から「そんなにサービスしなくてよい」と一蹴されてしまったが、学生達に後悔はなかったようである。

『ウチハソバヤジャナイ』の主人公夫妻には、ソバ屋を始めるきっかけとなったいたずら電話があった。今回参加した学生達にしてみれば東京公演がそれに当たるのだろう。このような経験をきっかけに、人は「自分とは何者か」という問いに一つの答えを見つけていくのかもしれない。今回の答えはさしずめ関西人ということか。異文化交流がもたらす不思議な作用を目にした瞬間であった。

笑われる愚人

—『万葉集』巻十六の能登国の歌の成立について—

追手門学院大学 基盤教育機構 大谷 歩

1. はじめに

現存する日本最古の歌集である『万葉集』には、20巻に約4500首もの歌が収録されるが、笑いにまつわる分類項目は存在しない。他者を嘲笑したり互いに揶揄しあう歌は、幸いにして巻16にいくつかの作品をみることができるが、これらの作品の多くは宴席における詠歌の記録の一部であり、文学のジャンルとして認識され、収録されたものとは思われない。万葉びとたちは何を笑いの対象とし、笑うことをどのように認識していたのか。また、笑いにまつわる歌を詠むことにどのような意義を見出していたのか、それらを記録しようとした動機は何であったのか。他にも、上代文学における笑いにまつわる課題は種々認められるが、本稿では、『万葉集』巻16の「能登国の歌」と題される作品を取り上げて、上記の課題の一端を考察してみたい。

本題に入る前に、上代文献における「笑い」の記述について確認しておきたい。『万葉集』および『古事記』や『日本書紀』で笑うことを意味する漢字の多くは「咲」である。写本によっては「笑」と書かれる場合もあるが、「咲(笑)」には主にワラフとエムの2系統の訓みが認められる。また、笑うことを意味する漢字には「嗤」「蚩」「嘲」「晒」「嘘」などがあり、嘲笑を意味する用例が多い。柳田國男氏の著名な「笑の本願」には、ワラフとエムとについて次のように述べられている。

ワラフは恐らくは割るという語から岐れて出たもので、同じく口を開くにしても大きくあけ、やさしい気持を伴なわぬもの、結果がどうなるかを考えぬか、またはむしろ悪い結果を承知したものとも考えられる。従って笑われる相手のある時には不快の感を与えるものときまっている。エムには如何なる場合にもそういうことがない。是が明らかなる一つの差別であった。¹

この柳田氏の指摘は、上代文献においても合致するものといえる。『万葉集』の歌において「咲」の字は、①花が咲くこと[サク]、②(主に女性が)微笑むこと[エム]、に用いられる。たとえば、葛飾の真間手見名の伝説歌には「…望月の 足れる面わに 花のごと 笑みて立てれば…」[望月之 満有面輪二 如花咲而立有者](巻9・1807番歌/高橋虫麻呂歌集)²とあり、真間手見名は花が咲くように微笑んで立っていたと表現されている。また、「道の辺の草深百合の花咲みに咲まひしからに妻といふべしや」[道邊之 草深由利乃 花咲余 咲之柄二 妻常可云也](巻7・1257番歌/古歌集)のように、花が咲くことを「ハナエミ」ともいい、花が開くことと人が微笑むことは近接する様態として認識されていた。これが「エム」である。

一方の「ワラフ」については、『古事記』上巻の天の石屋段に次のようにある。

天宇受売命、手次に天の香山の天の日影を繋けて、天の真析を縵と為て、手草に天の香山の小竹の葉を結びて、天の石屋の戸にうけを伏せて、踏みとどろこし、神懸り為て、胸乳を掛き出だし、裳の緒をほとに忍し垂れき。爾くして、高天原動みて、八百万の神共に咲ひき。³

上記は天の石屋段において、八百万の神々が石屋にこもった天照大御神を外へ導こうとした諸策の最後、天宇受売命の神懸りの様子を記す箇所であり、神々の作戦の仕上げは高天原が鳴動するほどワラフことであった。柳田氏は

また、「ワラヒには必ず声があり、エミには少しでも声はない。したがってエミは見るものであり、ワラヒはまた壁一重の隣からでも聴ける」（同前掲論）とも述べており、八百万の神々のワラヒは高天原がどよめくほどの大笑いであったことから、このワラヒは声を伴うものであることがわかる。一方、先に掲出した万葉歌のエミは微笑む容貌や花の開く様子を表現していることから、音声の伴わない視覚的な動作であった。

本稿が対象とするのは、柳田氏が言うところのワラフの類の笑いを導く作品である。もとい、そのように理解されている作品である。しかしながら、この作品にはワラフを意味する語は、無いのである。

2. 「能登国の歌」の解釈と問題点

能登国の歌三首

梯立の 熊来のやらに 新羅斧 落とし入れ わし 懸けて懸けて な泣かしそね 浮き出づるやと 見む わし
(巻16・3878番歌)⁴

右の歌一首は、伝へて云はく「或は愚人あり。斧を海底に墜して、鉄の沈みて水に浮ぶ理なきを解らず。聊かにこの歌を作りて、口吟みて喩すことを為しき」といへり。

能登國歌三首

塔楯 熊来乃夜良尔 新羅斧 墮入 和之 河毛侶河毛侶 勿鳴為曾祢 浮出流夜登 將見 和之
右歌一首、傳云或有愚人。斧墮海底、而不解鐵沈無理浮水。聊作此歌、口吟為喩也。

この作品（以下、当該作品という。歌のみを指す場合は、当該歌という）は、『万葉集』巻16の後半部、地方の歌々を集めた部分に収録される、「能登国の歌三首」と題された歌群の1首目である。2首目の3879番歌は「梯立の熊来酒屋に 真罵るる奴 わし 誘ひ立て 率て来なましを 真罵るる奴 わし」という歌である。ここには当該歌と同じ「梯立の熊来」という地名が詠まれており、同じく前半の句と後半の句の間に囃子詞と思われる「わし」が挿入されていることから、能登国の同じ地方でうたわれていた歌をまとめて収録したものと考えられる。いずれも作者未詳の歌である。

能登国は、奈良時代に統廃合が繰り返された国である。養老2(718)年に越前国の羽咋、能登、鳳至、珠洲4郡が独立して一国となり、天平13(741)年には越中国に併合され廃国となるも、天平宝字元(757)年に越中国から分離して再び一国となった。当該作品は能登国の置かれた時期に記録・収集された歌謡であると目される。具体的に、養老2年から天平13年の23年間か、天平宝字元年以降とするかは、巻16の複雑な成立の問題に絡み見解の分かれるところである。伊藤博氏は、巻16までの巻々は天平17、18年頃までに集成されたとみており、当該作品を含む地方の歌々を収録した一群について「資料としては存外に古いと考えられる」⁵と述べている。作歌年代の推定については後に少し触れるが、筆者はそこまでの古さを認めるのは難しく、天平期の作ではないかと推測する。

当該歌の内容は、熊来の「やら」（海底あるいは沼）に「新羅斧」を落としてしまったが、泣きなさるな、浮き上がるかどうか見てみよう、というものである。「熊来のやら」の「やら」については諸説ある。代表的な説を挙げると、仙覚『万葉集註釈』（仙覚抄）には「ヤラトハ、ミツ、キテ、カツミ（薦）アシ（葦）様ノ者ナト生ヒシケリタル、ウキ土ナリ。田舎ノ者ハ、ヤハラトモ云」⁶とあり、下河辺長流『万葉集管見』には「やらは水の底なる泥を、北國の俗にいふならへり」⁷といい、賀茂真淵『万葉考』は「夜良は沼也、方言也、上總國にては、蘆・薦生たるを夜良と云、此哥にても其意也」⁸という。鴻巣盛広氏の『万葉集全釈』の解説が最も詳しく、

今の熊木村・中島村・西岸村・豊川村・笠師保村・鉦打村などの一帯を古く熊来郷と稱したらしい。この附近は

七尾灣西部にあり、その最奥部に位してゐるので、潮波の流動が少く、従つて附近の河川からの土砂が堆積して、浅い海になつてゐる。ここにヤラとあるのは即ちその泥底の浅海の義らしい。⁹

とあり、土砂が堆積して出来た浅海をあらわす能登の方言とみている。いずれにしても、左注には「斧を海底に墜して」とあることから、水にまつわる場所、沼や海を指す言葉であることは動かない。

その斧について「新羅斧」とわざわざ謳っていることからすれば、普通の斧ではない、特別な斧であろう。この「新羅斧」についての理解は、契沖『万葉代匠記』精撰本に「新羅斧ハ彼國ヨ渡リタル斧ヲ云ヘル坎。此方ニテ造レトモ、新羅ニ造ルナリノ此國ニハ替レル、ソレヲ學ヘルヲ云坎」¹⁰と説かれるとおりで、新羅国からの舶来品か、あるいは新羅の製造法によって拵えた斧かのいずれかであると思われる。そのような舶来品の斧、もしくは新羅の製法で作られた特殊と思われる斧を海辺（あるいは沼）に墮とすという事態は、どのような場合に起こり得るのだろうか。本稿ではこの点について明確に言及することはかなわないが、「やら」に特別な「新羅斧」を墮とすという状況が日常想像し得る範囲では起こり得ない事態であったとすれば、笑いを誘う要因の一つとなったかもしれない。あるいは、『万葉集全釈』が「なほ能登には朝鮮との直接の交通があつた形跡があるから、かういふ舶載の日用品も行はれてゐたのであらう」と述べるように、能登国の人びとにとってある程度馴染みのある品物であったとするならば、「熊来・くまき」と「新羅・しらき」¹¹の音の類似性、すなわち母音「あ」＋「き」の韻を求めて選ばれた可能性も考えられよう。

次に左注によってこの歌の由来をみておく。いま引用テキストとした講談社文庫本の訳文を見てみると、次のようにある。

右の歌一首は伝えていうには「ある愚か者がいたとか。その者は斧を海底に落してしまひながら、鉄が沈んで水に浮かんで来ないという理屈を知らなかつた。そこでちょっとこの歌を作つて口ずさみ、教えさとした」という。

同書は「喩すことを為しき」の注で、「逆接的な喩し。後半句をさす」と述べており、水に浮くはずのない斧を、浮いてくるかもしれないからみてみよう、という皮肉を込めた喩であると解している。このように、愚人が斧を水中に落とすも、鉄が水に浮かばないという道理を知らないために、そのことを第三者が喩した歌であるという理解は、現代諸注釈に広く行われている解釈である。

①新潮日本古典集成本

右の歌一首には、こんな伝えがある。ある愚か人が、斧を海底に落し、鉄が沈んだら浮ぶ道理がないのもわからずにいた。そこで周りの人が、慰みにこの歌を作つて吟み、当てこすつてやったという。¹²

②新編日本古典文学全集本

右の歌一首は、言伝えによると、ある愚か者がいて、持っていた斧が海底に落ちたが、この男には鉄が沈み水に浮ぶ道理がないということが分らない。まずはこの歌を作つて、口ずさみ教訓にしてやった、ということである。¹³

①新潮日本古典集成本は、明確に愚人ではない周囲の第三者が吟じた歌であると解釈しており、また②新編日本古典文学全集本は、斧を墮としたのは愚人であると解釈している。これらの解釈に異を唱えたのが次の新日本古典文学大系本で、特に歌の主体、すなわち喩として歌を作つたのは愚人本人であると論じている。

一般に、この歌は、斧を落として泣く愚人を諭したものと理解される。しかし、それならば、「斧が浮き出るか見よう」という歌の結びは、嘲弄でこそあつても、愚人への「喩」とは言えない。また、万葉集の題詞・左注に「聊」の字は類出するが、「聊」の前後に動詞のある二十に余る例のすべてにおいて、二つの動詞の主語は同じである。（中略）理を解しなかつたことと、この歌を作つたのは同じ愚人のことと理解されるべきである。¹⁴

新日本古典文学大系本は、斧を落とした人を慰めるために、道理を知らない愚人がこの歌を口ずさんだという、下記の井上通泰氏の『万葉集新考』の説により解釈すべきであると主張する。

拙き漢文にて自他の別明ならねど歌にナナカシソネとあると文に聊作此歌口吟爲喩也とあるとを見れば斧をおとしたるは愚人にあらず。左註の意は愚人が人の斧をおとしたるを見て鐵の沈めば水に浮ぶ理なきを知らず此歌を作りて斧をおとしたる人を慰めたるなりといへるなり。¹⁵

たしかに、大谷氏が指摘するように「聊」の接続の在り方からすれば「聊かにこの歌を作りて、口吟みて喩すこと」をしたのは愚人でなければならず、すると歌で「な泣かしそね 浮き出づるやと 見む」と斧が浮いてくると信じている点も愚人の発言・思考として矛盾しない。歌で教え諭したのが第三者であったならば、「な泣かしそね 浮き出づるやと 見む」とうたうことは辻褃が合わないのである。

新日本古典文学大系本の校訂者の1人である大谷雅夫氏は、近年当該作品の問題点についての論考を発表された。そこでは、新日本古典文学大系本でも説かれた「聊」の用法の指摘に加え、新編日本古典文学全集本の「持っていた斧が海底に落ちた」という解釈について、

愚人が自らの斧を落としたという解釈だが、そう解釈されるためには、この漢文は「斧墮」ではなく「墮斧」の語順、つまりは「或有愚人、墮_レ斧海底_ニ（或有る愚人、斧を海底に墮して）」の形でなければならない。しかし、ここはそうではない。（中略）すなわち、ある「愚人」が、たまたま誰かの「斧」が海に落ちたときに、「鉄沈みて理として水に浮かぶことなきことを解らず」してこの歌を作ったことと解釈される。¹⁶

と述べている。大谷氏のこの指摘は、「聊」の用法の指摘とあわせて強い説得力を持つものといえる。当該左注の読み取りは、新日本古典文学大系本と大谷氏が指摘するとおり、水に沈んだ鉄が浮かび上がらない道理を知らない愚人が、斧を墮としたある人物に向けて慰め諭した歌であるとみるべきであろう。

左注の文脈の読み取りは大谷氏が指摘するとおりであったとしても、依然解消されない疑問が残る。それは、このような愚人の滑稽譚が付随する当該歌は、能登国という地方に伝わる歌であり、かつ集团的要素がなお残存しているとみられる点である。この歌と左注の関係性をどのように捉えるべきかが、次なる課題となろう。当該作品の性格について、窪田空穂氏の『万葉集評釈』は次のように指摘する。

形は旋頭歌である。しかし短長長の形にしてゐるだけで、必しも五七音を守らうとしてゐないのは、短歌以前の謠物の形にしようとしたものである。此の歌は、形は古風であるが、心はむしろ新しい物に見える。それは真正の古風の歌には、斧を泥海に落して諦めかねてゐる者に對し、それを愚かと思、愚かさを滑稽と見、しかも嗤ひをこらへて、鄭寧な語をもつて揶揄するといふやうな、人の悪い、屈折を持つた歌は無かつたらうと思はれる。又、たとひ有つたにもせよ、それが民謠として謠ひ續けられてゐたとは想像出来ない。多分、奈良朝時代に入つての好事の人の、軽い興味より假構しての歌であらう。¹⁷

窪田氏は、当該歌を古風に装った奈良時代の作とみている。それは、このように愚人を揶揄する内容の歌が、伝統的にうたい継がれてきたとはみなし難いという理解からである。窪田氏も、従来説のように第三者が愚人を教え諭す歌とみているが、万葉歌において他者を笑う、いわゆる戯笑をテーマにした歌々は奈良朝（天平期）に活動したと考えられる人物の作品に多い。その点、窪田氏が当該作品を奈良時代の作と指摘したのも首肯されるのであり、また能登国の存国期間に照らし合わせると、当該作品は天平13年までに収集された可能性が高いと思われる。また、武田祐吉氏『増訂 万葉集全註釈』も当該歌を民謡風に装った歌と見ており、「民謡ふうになつてゐるが、何人かが民謡に擬して作つたものだろう。民謡の替歌というような性質の歌である」¹⁸と述べている。当該作品の題材・内容の新しさという点においては筆者も共感するのであり、両氏が述べるように、当該歌は能登国に伝わる歌謡の曲調を利用した、新たに創作された替え歌的な作ではないかと推測される。

では、この歌の作者はなぜあえて破調の歌謡風に仕立てて歌を作る必要があつたのだろうか。あえて謡いもの風に仕立てたからには、独詠歌として個人が密やかに楽しむ類の歌ではなく、集団で吟詠する、あるいは集団の場で供される歌であつた可能性が高いと判断される。

当該歌の集団性について、当該歌に挿入される「わし（和之）」からも考察しておきたい。「わし（和之）」は賀茂

真淵『万葉考』に「和之は和主の略也、人をさしていふ」ともいわれたが、加藤千蔭『万葉集略解』に紹介される本居宣長説に「宣長は『わし』はたゞ調へにそへていふ辭也。さいばらなどに此類のそへ辭多しといへり。さも有べし」¹⁹とあるように、現在では囃子詞とみる向きが多い。宣長が指摘する『催馬楽』には、たしかに囃子詞とみられる類の言葉が挿入される作品が多く存在する。たとえば「我駒」には、

いで我が駒 早く行きこせ 真土山 あはれ 真土山 はれ
真土山 待つらむ人を 行きて早 あはれ 行きて早見む²⁰

のように、「あはれ」「はれ」などの囃子詞が用いられている。当該歌は5・7・5・5（わし）／6・6・7・2（わし）、と音数の不規則な4句ずつで構成されており、「わし」が前半部分と後半部分の末尾に位置していることは明白である。このことから、「わし」には歌の調子を整える囃子詞的な役割が認められる。囃子詞を挿入するのは、複数存在する歌い手の調子を整えるためであり、単独で披露する口吟の歌には必要ないものであろう。

このように、当該歌の性質からは集団詠としての性格をみることができ、左注の愚人の伝えと当該歌とがどのように関わり合うのかが問題となるといえる。次に、この愚人の喩と位置づけられた当該歌と、左注との関係性について論じてみたい。

3. 笑われる愚人——当該作品成立の背景

当該作品は、この愚人の無知や滑稽を笑うものとして理解されてきた。たとえば、鴻巣盛広氏の『万葉集全釈』は「熊來地方の民謡らしく、内容は斧の水に浮かぬことを知らない愚人を笑つたもので、其處に滑稽味が溢れてゐるのである」と述べ、澤瀉久孝氏の『万葉集注釈』も「『な泣かしそね浮き出づるやと見む』と敬語まで使つて、誘ひかけたところに、相手をばかにしてゐるところを示したもので、愚人の愚行を嘲笑した意味が示されてゐるものと認められる」²¹と述べている。また、大谷雅夫氏は前掲論で、「この歌と左注の笑いは、愚者が智者を教戒し、慰謝するというその点にこそ存した」と当該作品の笑いについて指摘している。

たしかに、水に沈んだ鉄が自然と浮いてくるはずはなく、その道理を理解していない者はまぎれもない「愚人」であろう。その様が滑稽であることも否定しない。しかし、当該作品は愚人の愚かさを揶揄し、その滑稽さを嗤笑するために作られ、記録されたものだろうか。結論からいうと、筆者は当該作品は宴会などの場で、その場に集った者が左注にあるような愚人の滑稽譚を楽しみ、皆でこの「愚人」になつてうたい騒ぐという類の歌だったのではないかと考えている。以下にその理由を述べていく。

当該作品を論じる際によく引き合いに出されるのが、同じ巻16に収録される、見部女王に嗤笑される尺度娘子の作品である。

見部女王の嗤へる歌一首

美麗しもの何所飽かじを尺度らが角のふくれにしぐひあひにけむ（巻16・3821 番歌）

右は、時に娘子あり。姓は尺度氏なり。この娘子高き姓の美人の詵ふるを聴さずて、下き姓の媿士の詵ふるを応許しき。ここに見部女王の、この歌を裁作りて、彼の愚なるを嗤咲へり。

左注によると、ある時尺度氏の娘子がいて、「高姓美人」の男の「詵」、つまり求婚を聞き入れず、「下姓媿士」の求めに応じたという。このことを見部女王が「愚」であるとして「嗤咲」し、この歌を作つたと伝えられる。見部女王は閨歴不明の女性であり、尺度娘子との関係も不明である。歌意も難解な部分があるが、「角のふくれ」は尺度娘子の選んだ結婚相手である「下姓媿士」を貶める表現とみなされ、見部女王の「嗤咲」は、尺度娘子の選択した男の容貌とそのような男を選んだ娘子に対して向けられている²²。

このように、見部女王の歌は明確に娘子の「愚」を「嗤咲」することが目的である。一方、当該作品においても、

歌の目的は斧を墮とした某かを愚人が「喩す」ことであり、「な泣かしそね 浮き出づるやと 見む」という歌の内容は、道理を知らない愚人の「喩」として矛盾はない。筆者が気に掛かるのは、この愚人が衆人の嗤笑の対象であり、愚人に対する嘲笑も含めて左注の伝えや歌を楽しんでいたならば、左注に「故、皆人その愚なるを嗤咲へり」のような記述があってもよかつたのではないか、という点である。このように考えるには、理由がある。

大谷氏は前掲論において、当該作品の愚人と、漢訳仏典『百喩経』に描かれる愚人の滑稽譚との共通点を指摘している。また、筆者はすでに注22の「児部女王の嗤へる歌一首」を取り上げた論考において、『百喩経』の「愚」の在り方について検討し、当該作品を例として前掲の児部女王の作品と『百喩経』との関係性を論じている。ただしこの論は大谷氏の別稿（新日本古典文学大系本の解説）²³で、「世間愚人」が仏典、中でも『百喩経』に頻出する語であるという指摘を受けての発見であった。すなわち、『万葉集』巻16の愚人にまつわる作品には『百喩経』が深く関わっていることが推測され、当該の左注の筆者が、奈良朝にたびたび写経された『百喩経』を認知していた可能性は十分に考えられるのである。そうであればなおのこと、当該作品が愚人を嗤笑することを意図していたならば、「皆で愚人を笑いものにした」という記述のないことが不思議に思えてくるのである。

『百喩経』は譬喩経典の一つであり、愚人の喩話を九十八話収録しており、各話の末尾には愚人の行いを仏教者や凡夫の言動に重ね、道徳的教訓や仏教的教戒を説くという構成である。その中には、当該作品の愚人とよく似た過ちを犯した愚人の話がある。

●『百喩経』巻1「船に乗り釘を失ふ喩」（『国訳一切経』印度・本縁七）

昔、人有り、船に乗り海を渡る。一つの銀釘を失ひ水の中に墮す。即便ち、思念ひらく「我、今、水に書き記を作さむ。之を捨て而して去り後当に之を取るべし」と行くこと二月を経て師子諸国に到る。一河水を見て便ち其の中に入り本失ふ釘を覓む。諸人、問ふて言く「何の作す所を欲す」と。答へて言く「我、先に釘を失ふ。今、覓め取らむと欲す」と。問ふて言く「何処に於て失ふ」と。答へて言く「初め、海に入りて失ふ」と。又復、問ふて言く「失ふて幾時を経たる」と。言く「失ふて来二月なり」と。問ふて言く「失ふて来二月、云何が此れを覓めむ」と。答へて言く「我、釘を失ひし時水に書き記を作す。本画く所の水此と異ること無し。是の故に之を覓む」と。又復問ふて言く「水別ならずと雖も汝昔失ふ時乃ち彼に在り。今、此に在り、覓むるも何に由り得可けむ」と。爾の時衆人、大笑せざるは無し。

亦、外道、正行を修せず相似の善中横に計り苦困し以て解脱を求むるが如きは猶し愚人釘を彼に失ひ此に於て覓むるが如し。²⁴

上記の内容は、ある人が海中に銀釘（銀の食器）を落としてしまったが、水に記を付けたので後に食器を得ることができると思い、二ヶ月後にセイロン諸国に至り、河の中に入って失くした食器を探し始めた。そしてその訳を尋ね知った諸人に大笑いされたというものである。この人は「愚人」とであると評され、そのような行為は外道の行いに等しいと説かれている。

『百喩経』にはこのような例話が多く収録されており、そこに登場する愚人は大衆から嗤笑されるのが常である。愚なる行いは必ず嗤笑されるのであり、喩話としてその愚は正されるというのが一連の型であった。ここに、『百喩経』を参照することで〈愚人—喩—嗤笑〉という強固な結びつきが見出されるのである。つまり、筆者の疑問は、愚人の喩話には嗤笑がつきものであるのに、当該左注にはなぜ愚人が嗤笑されたという記述が無いのか、ということである。

この〈愚人—喩—嗤笑〉という関係性を押さえた上で、改めて『万葉集』の左注の在り方について確認しておきたい。当該作品を含めた「伝云型」の左注の形式について、伊藤博氏は「昔からこう伝え云われてきたという意味というよりはむしろ、誰かがある場面で伝え語ったという意味にとるべきもの」であり、「歌の由来に興味を置いた言葉であって、語りの場を反映する語」²⁵であると述べている。つまり、あくまでも歌の由来を文字に書き起こすことがこの「伝云」型の左注の役割であり、その結果がどうなったか、愚人が笑われたか否かに言及することまでは求めら

れなかった可能性が考えられる。もちろん、当該作品の漢文の拙いことは、夙に井上通泰氏や大谷雅夫氏が指摘するとおりであり、書き漏らしたということも十分に想定される。しかし、滑稽な愚人の喩の歌が嗤笑の対象となったことを多くの研究者が言及するように、この作品と嗤笑とは切り離せない関係にあり、それは先に述べた『百喩経』の構造と等しく、愚人は笑われるべき存在であるという前提があるからである。

ここまでの考察で、左注に愚人が嗤笑されたことについての言及がないのは、愚人が笑われるのは自明のことであるため省略されたという理解、あるいは愚人が笑われたことまでは歌そのものの由来に関わりないため省略されたという理解、あるいはその両方により省略されたということが考えられる。加えて、筆者は左注にあえて愚人を嗤笑する文言がないことに、積極的に意味を見出したいと考える。

当該歌が個人で吟じる性格のものとは見なしがたい、集団的な性格の歌であることは前章で述べたとおりである。このことと、左注の内容が〈愚人一喩一嗤笑〉という結びつきをもって書かれ、理解されることを重ね合わせて考えるならば、当該歌は宴などの歌に興じる場集った人びとが、愚人の滑稽譚を聞いて笑い、皆が愚人となって合唱された歌であったのではないかと推測する。嗤笑されるのは特定の個人としての愚人ではなく、その場に集い歌をうたう全員であった、ということである。とすれば、この事情を筆録するのは誠にややこしく、むしろ歌の由来を記すという左注の性格からも不要と判断されたであろう。まして、この左注の筆者はあまり漢文に長けていないようであることも一因となったかもしれない。愚人の滑稽譚を笑い、さらに愚人の歌を皆でうたい楽しむ宴などの場に供されたという状況が、当該作品の背景にあったのではないだろうか。

その滑稽譚と歌が筆録されたのは、前述したように奈良朝以降のことと思われ、『百喩経』などの漢籍仏典の知識を持つ某かが創作した、あるいは似たような出来事が能登国で起こり、そのことに取材して物語化されたことが考えられる。歌の成立について明言することは難しいが、先に武田祐吉氏が替歌説を論じていたように、あるいはその滑稽譚を聞いた誰かが、土地の歌謡の曲調に合わせて見事に替え歌を試みさせたのだろうか。歌の成立事情をどのように見定めるかは、今後の課題である。

以上のように、左注の滑稽譚に基づき、皆が愚人になり代わって合唱した歌と捉えるならば、当該歌が集団詠的な要素を持ち合わせることで、左注に愚人の喩の歌として説明されること、愚人が嗤笑されたという文章のないことの説明が可能となるように思われるのである。

4. おわりに

本稿では、『万葉集』巻16に収載される「能登国の歌」の1首目を取り上げ、当該作品の成立の背景を論じた。はじめに、当該歌の語彙的な解説と、「わし」の囃子詞から当該歌は個人の独詠ではなく、集団詠的な要素を持っていることを確認した。次に左注について、大谷雅夫氏の近年の論説を中心に、当該左注の文脈を井上通泰説および大谷雅夫説で読解すべきことを論じ、その上で、当該歌と左注の関係性について考察した。

本稿における筆者の問題意識は、2点である。1つは、左注の愚人の滑稽譚と集団詠的要素のある歌との関係性、2つに、道理を知らない愚人が得々と教え諭している様を嗤笑することまでが作品の価値に深く関係しているにもかかわらず、愚人を嗤笑するという文言のないことの原因である。2点目の問題については、大谷雅夫氏が指摘し、また筆者も以前に検証した『百喩経』から導かれる〈愚人一喩一嗤笑〉の結びつきから生じた疑問であった。嗤笑されるべき愚人に対する揶揄の文言が左注に無いことと、歌の集団的性格から、当該作品は愚人の滑稽譚を楽しみ、皆が愚人となつてうたうことを背景に成立した作品であったことを論じた。愚人は一個人ではなく、誰しもが愚人になり得ることから、「故、皆人その愚なるを嗤咲へり」などの記述は左注に書かれ得なかったのである。

もちろん、当該歌が一回的にうたわれた歌謡であるか、繰り返しうたわれたものかは当該作品の記述から判断する

ことは難しい。また、『万葉集』はあくまでも記載の文芸であるため、声でうたわれたレベルの理解を持ち込むことは控えるべきであることは承知しているつもりである。しかし、個人の独詠的な歌とは思われぬ当該歌と、左注の愚人の話との関係性は、より丁寧に説明されるべきであろう。その時に、嗤笑されたはずの愚人に対する明確な揶揄の文言のないことから、『百喩経』を手がかりとして上記のような結論に至ったわけである。巻16の作品の読解には大変な困難が伴い、本稿の解釈にも多くの課題が残されているが、当該作品の読解の一つの可能性として提示しておきたい。本稿が『万葉集』および上代文学における笑いの課題について、その一端でも論じることができていれば幸いである。

〔注〕

- 1 柳田國男『不幸なる芸術／笑の本願』（1979年、岩波文庫／初版は1946年、養徳社）。以下、柳田氏の論は同書による。
- 2 『万葉集』の引用は、中西進『万葉集 全訳注原文付』（講談社文庫）による。以下同じ。
- 3 山口佳紀・神野志隆光校注・訳、新編日本古典文学全集『古事記』（1997年、小学館）。
- 4 第6句「河毛侶」の箇所には校異が存する。諸写本において「河毛侶」に作るのは、西本願寺本・紀州本・大矢本・細井本・温故堂本・京都大学本・活字無訓本・活字附訓本・寛永版本の諸本であり、『仙覚抄』以下多くの古注釈も「河毛侶」に作る。一方、類聚古集・尼崎本・広瀬本には「阿毛侶」とあり、京都大学本の「河」の右傍に緒で「阿」とあり、左傍に「イ本」とある。日本古典文学大系本は「河毛侶」を採り、「心にかけて。心配して。転じて、決しての意か」（1962年、岩波書店）とし、澤瀉久孝『万葉集注釈』は「後世は下に否定、ことに禁止の表現が来る事が多く、その否定の意を強めて「決して」の意となるので、ここもさうした意味にとるべきではなからうか」（1966年、中央公論社）と追認する。一方の「阿毛侶」は、類聚古集や尼崎本を重視した日本古典文学全集本・新編日本古典文学全集本・新日本古典文学大系本などが採用しており、新日本古典文学大系本は「声を立てて、声を立てての意に解する」（2003年、岩波書店）と述べている。
- 5 伊藤博「由縁有る雑歌」『万葉集の構造と成立』下（1974年、塙書房）。
- 6 万葉集叢書8『仙覚全集』（1977年、臨川書店）。
- 7 万葉集叢書6・7『万葉集管見・万葉集目安補正』（1977年、臨川書店）。
- 8 『賀茂真淵全集』第5巻（1985年、続群書類従完成会）。以下、『万葉考』の引用は同書による。
- 9 鴻巣盛広『万葉集全釈』第5冊（1937年〈再版〉、廣文堂書店）。以下、『万葉集全釈』の引用は同書による。
- 10 『契沖全集』第6巻（1975年、岩波書店）。
- 11 「新羅」をシラキと訓むことは、『万葉集』巻15・3696番歌に「新羅奇敵可（しらきへか）」とみえ、『出雲国風土記』に「栲衾、志羅紀の三埜」とみえる。
- 12 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎校注、新潮日本古典文学集成『万葉集』4（1982年、新潮社）。
- 13 小島憲之・東野治之・木下正俊校注・訳、新編日本古典文学全集『万葉集』4（1996年、小学館）。
- 14 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注、新日本古典文学大系『万葉集』4（2003年、岩波書店）。
- 15 井上通泰『万葉集新考』第6巻（1928年、国民図書株式会社）。
- 16 大谷雅夫「『万葉集』の訓詁三題一「灰にていませば」（二一三）・「ある愚人」（三八七八左注）・「大島の嶺に家もあらましを」（九一）一」、『美夫君志』第101号（2020年10月）。以下、断りのない限り大谷氏の論は本論による。
- 17 窪田空穂『万葉集評釈』第10巻（1985年、東京堂出版）。
- 18 武田祐吉『増訂万葉集全註釈』第11巻（1957年、角川書店）。
- 19 加藤（橘）千蔭『万葉集略解』第4冊（1931年、博文館）。
- 20 白田甚五郎・新聞進一・外村南都子・徳江元正校注・訳、新編日本古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（2000年、小学館）。
- 21 澤瀉久孝『万葉集注釈』巻第16（1966年、中央公論社）。
- 22 大谷歩『万葉集の恋と語りの文芸史』第8章「愚なる娘子—『児部女王の嗤へる歌』をめぐって—」（2016年、笠間書院）。
- 23 大谷雅夫「萬葉集と仏教、および中国文学」（新日本古典文学大系『万葉集』4、2003年、岩波書店）。
- 24 『国訳一切経』印度撰述部・本縁部7『百喩経』（1934年、大東出版）。
- 25 伊藤博「万葉の歌語り」（『国文学 言語と文芸』4巻1号、1962年1月。後『万葉集の表現と方法上』1975年、塙書房に収録）。

【付記】

筆者は上方文化笑学センターの事務局担当という立場ではございますが、本誌への投稿をお認めくださいましたセンター長の広瀬依子先生ならびに所員の先生方に深く御礼申し上げます。

活動報告

笑学カフェ開催

～第3回の様子～

追手門学院大学上方文化笑学センター所員 辰本 頼弘

2021年11月29日（月）、第3回目の笑学カフェを担当した。

テーマは、「スポーツの上達は笑い？」

参加者は、社会学部の女子学生1名と広瀬先生、事務局から中川さん。

進め方は、辰本が話題の提供を行い、皆さんから意見や感想等を自由に発言してもらった。

笑学カフェの要旨は以下の通りです。

@ 日常よく笑う？

・何に反応して笑うかは個々により、また場面により異なるが、友だちといる方が家族といるより笑いは多い。

→ 対人による笑いの変化

・年齢を重ねると笑いの沸点が高くなり、多少の事では面白い感じない。

「箸が転んでもおかしい年頃」が懐かしい。 → 年齢による可笑しさの感じ方

@ 笑いの種類

・微笑み ・大笑い ・苦笑い ・嘲笑 ・冷笑 等、面白い時だけ笑いが出るのではない。 → 笑いを伴う表情の変化

・一般に、「快の笑い」「社会的な笑い」「緊張緩和の笑い」がある。 → 場面による笑い

@ 笑いの影響

・大笑いした時に、悲しくもないのに涙が……。これは緊張が大きく解けて、副交感神経が優位働きリラックスが大きい時の状態。 → 神経系の作用

・怖い先生がその場からいなくなったら緊張がほぐれ自然と笑みが……。 → 場の転換

・ピンチの場面や緊張している場面では、笑いが出てこない。こんな時、面白いことを言ったりして、誰かが場を和ますことにより緊張感が払しょくされる。 → 笑いの提供

@ スポーツと笑い

・昔のスポーツ指導は理不尽なぐらい厳しい指導が王道。現在は「楽しく取り組む」ことが大事。 → スポーツ指導の変化

（昔はスポーツ場で「白い歯を見せるな、ニヤニヤするな」と叱られた。）

・笑うことで緊張が緩和され、リラックス状態になり取り組みが楽しくなる。その結果パフォーマンスが上がる。

→ 笑いの効果

・笑うことで雰囲気も良くなり、人が集まり、人間関係が豊かになる。 → チームの雰囲気

@ スポーツ場面での笑い

・誰しも緊張場面がおとずれる。その時に自身のリラックスをどのように保つか、見つけるかが大事。普段のトレーニングからココロの訓練を。 → 笑いを取り入れる工夫

・笑顔を作ることや笑うことは、日常的に普段からできること。苦しい場面ほど笑顔で。 → プラス思考

(まとめ)

一見、スポーツ場面では勝利や技能達成過程において「苦しさ」や「辛さ」等のイメージがありますが、それを乗り越えたときの喜びや自然と生まれる笑い (smile や Laughter) は、見ている者 (応援している者) も感動に巻き込みます。

笑うだけでは (笑っているだけでは) スポーツが上達するわけではありませんが、リラックスを生む笑いをどれだけ取り入れられるか、これが身近なスポーツ上達の秘訣かも知れません。

公開講座へ出向いて

～「浪花千栄子と大阪」「ヒトと喜劇一笑い合う力」

追手門学院大学上方文化笑学センター長・国際教養学部国際日本学科 広瀬 依子

◎〈浪花千栄子と大阪〉

2021年12月に、2件の公開講座に出していただく機会を得た。いずれも一般市民向けの催しである。

まず12月5日が〈令和3年度 住まいのライブラリーイベント「ブックトークサロン2021 浪花千栄子と大阪」である（於・同センター3階ホール）。主催は大阪市立住まい情報センター。住まいを借りる、建て替える、購入するといった相談や情報発信はもちろんのこと、暮らしや文化についても目を向けているセンターだ。専門図書館「住まいのライブラリー」を設置しており、誰でも自由に利用できる。

今回の講座は、そのライブラリー所蔵の図書一冊を取り上げて関連の講座を行うというシリーズの一環である。取り上げられたのは『水のように』（朝日新聞出版）。大阪のお母さんとも言われた女優・浪花千栄子の自伝だ。2021年のNHKの連続テレビ小説「おちょやん」の主人公のモデルになり、再び脚光を浴びたのは記憶に新しい。ことに高齢者の方々にとっては懐かしい女優であり、私のような中年世代にとっては「オロナイン軟膏の看板の人」としておなじみである。残念ながらリアルタイムで出演作を見た記憶はないのだが、DVDで出演映画を見て、恐ろしく上手いのに驚嘆したのを覚えている。『女系家族』の亡姉への嫉妬と恨みを抱える女性、『悪名』の気っ風のいい女侠客など、さまざまな役を演じ分けた。

講座にお越しくくださったのは、40代以上の方がほとんどである。前述した通り、浪花千栄子といえば、すぐに「ああ、あの人」とわかっていただけるのありがたい。知人に誘われて女優募集に応募、映画や舞台に出演する女優になった千栄子は、道頓堀を本拠にする笑いの劇団・松竹新喜劇に在籍したこともあった。

その活躍ぶりは皆さんよくご存じなのだが、まずは浪花千栄子の人生を振り返るところから始めた。浪花千栄子は数え年の9歳で道頓堀の仕出し料理店に奉公に出ており、この経験が後の浪花千栄子を造ったと言えるからだ。時代は大正初期である。当時の道頓堀は歌舞伎をはじめとする芸能が盛んなまちだった。劇場へ料理を届けに行った際、舞台袖から覗き見た舞台。それが少女の千栄子が芸能に親しむ源であった。

また、大正時代は女性が社会へ出始めた時期としても見逃せない。明治末期に平塚らいてうが雑誌『青鞥』を創刊、女性解放運動が始まった。同時期に、日本の新劇女優第一号と言われる松井須磨子が『人形の家』で主演し、評判を呼ぶ。須磨子の演じたノラ役は、自分を人形のように可愛がる夫から自立する設定だ。いわば女性の自我の目覚めを描いている。そして大正初期に宝塚少女歌劇団が設立される。少女歌劇はブームとなり、道頓堀にほど近い宗右衛門町のお茶屋には、芸妓によるダンス団「河合ダンス」も設立された。つまり、千栄子が道頓堀で働いていた時期は女性が芸能の表舞台に出てくる時期だったのである。

現在の道頓堀は観光客であふれ（コロナの影響で、ここしばらくは人出が減っているが）、飲食店やお土産店が立ち並んでいる。しかし、当時の道頓堀は芝居のまちだったのだ。自伝には奉公はつらいことばかりだったと記されているが、場所が道頓堀でなければ、名女優・浪花千栄子は生まれていなかったかもしれない。

また、講座の休憩時間と終了後に、数人の聴講者の方が質問に来てくださった。さらに、浪花千栄子の芸名の由来をお教えいただいたり、自作された明治時代の道頓堀の地図等を下さったりもした。このように声をかけていただく

のは、大阪で開かれた講座が多い。これも浪花千栄子と大阪の気風につながっているのではないか。オンライン参加も含め、私よりも年代が先輩の方々がほとんどであったが、皆さんの熱心な姿勢に、探究心の深さと大阪への愛着を感じた。



ブックトークサロン 浪花千栄子と大阪

◎ 〈ヒトと喜劇—笑い合う力〉

続いて12月25日にはイベント〈KYOTO STEAM—世界文化交流祭—〉の一環である〈「きっかけの発見」トーク・プログラム〉である。〈KYOTO STEAM〉では屋内・屋外でさまざまな催しが行われたが、このトーク・プログラムには3つのテーマが設定された。筆者はそのうちの〈ヒトと喜劇—笑い合う力〉のファシリテーターを担当した（於・ロームシアター京都）。ちなみにあと2つのテーマは〈“電機の繊維” PIECLEX—もの・ことを生み出す力〉〈科学とまじない—願いを込める力〉である。

新型コロナウイルスが蔓延している現在、笑いたくても笑えない人もいるだろう。しかし、人間は笑う動物である。笑いは困難な現状を乗り越えるきっかけになるのではないか。笑いの果たす役割を見つめる内容である。

まず初めに、関西学院大学の松阪崇久准教授による講演が行われた。笑いを持つと言われるチンパンジーについて、ヒトの笑いにはどのような要素があるのか等を、スライドとともに解説された。ヒトの笑いの特徴のひとつに伝播していくことがある、との指摘が興味深いものだった。日常生活の中で、傍にいる人や周囲が笑っているのにつられて、つい自分も笑ってしまった——ほとんどの人が、そんな経験をしたことがあるだろう。誰に教えられたというものではない。自然とそうなるのである。

それでは、人為的に起こす笑いとはどのようなものか。劇団・THE ROB CARLTONの代表で、劇作家・演出家の村角太洋氏が、解説とともに笑いを生み出す過程を実践した。同劇団の満腹満氏、村角ダイチ氏の2人が、太洋氏執筆の短時間の芝居を演じるのである。満腹氏は京都のタクシーの運転手役、ダイチ氏は遠方から訪れた地理不案内の乗客役である。最初は、間（ま）や掛け合いのリズムなどを考慮せず、そのままセリフを読んでみる。ここでは笑いは起こらない。その後、太洋氏が間の取り方や声の強弱などの演出をその場でつけていく。結果、2人の間に「ズレ」が生まれると客席から笑いが起こったのである。ふだん接することのできない、笑いを生み出す過程に触れられて、観客の皆さんも発見が多かったようだ。

最後は筆者が進行役となり、松阪准教授と村角太洋氏の対談が行われた。コロナの影響下、笑ってもいいのか、喜劇を演じてもいいのか迷ったという太洋氏の発言には、笑いを創造する現場の人びと全員が抱いてあるであろう切実な気持ちを汲み取ることができた。

いずれ新型コロナウイルスが終息した際、さまざまな振り返りが行われるであろう。渦中にある今のわれわれが笑いについて考察することは、まさに、振り返りのきっかけになるのではないだろうか。



〈ヒトと喜劇一笑合う力〉
実践を行う村角太洋氏、村角ダイチ氏、満腹満氏（右から）

2021 年度上方文化笑学センター活動記録

2021 年

- 5 月 6 日 第 1 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 6 月 3 日 第 2 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 6 月 14 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 6 月 15 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 6 月 28 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 6 月 29 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 7 月 1 日 第 3 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 7 月 12 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 7 月 13 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 8 月 3 日 第 4 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 9 月 30 日 第 5 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 10 月 26 日 第 6 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 11 月 15 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 11 月 16 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 11 月 29 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 11 月 30 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 12 月 13 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 12 月 14 日 笑学カフェ 於：zoom（オンライン）
- 12 月 7 日 第 7 回所員会議 於：Webex（オンライン）

2022 年

- 1 月 30 日 第 8 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 2 月 28 日 第 9 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 3 月 9 日 研究会（発表者：高垣 伸博、大坂 幸司） 於：zoom（オンライン）

メディア掲載

- ・ 広瀬依子 「俳優と聞き手の信頼関係」（『演劇界』2021 年 10 月号、2021 年 9 月刊行）。
- ・ 広瀬依子 「『ブックトークサロン 2021』12 月 5 日（日）に開催決定！テーマは、『浪花千栄子と大阪』」（『あんじゅ』volume88、2021 年 10 月）。
- ・ 横田 修 社会学部表現舞台プロジェクト STEP（作／演出／出演）ラジオドラマ「鼻曲がりと言われた少年」の記事：「更新口蓋裂 歌手の物語」読売新聞 2022 年 2 月 6 日（日）掲載。

テレビ・ラジオ出演

- ・ 広瀬依子 NHK ラジオ第 1 『マイあさ！関西』7：45-7：50（おすすめ関西文化芸能情報コーナー）。
放送日：4 月 10 日／5 月 8 日／6 月 12 日／7 月 10 日／8 月 14 日／9 月 11 日／10 月 16 日／11 月
13 日／12 月 11 日／1 月 8 日／2 月 12 日／3 月 12 日

- ・横田 修 社会学部表現舞台プロジェクト STEP（作／演出／出演）
ラジオドラマ「鼻曲がりと言われた少年」（番組名「みしま・ピクシーダスト」）の演出を担当。三島丘の一部エリア、Amazon Music、Spotify、Podcastなどで配信。
放送日：10月26日（放送前スペシャル）／11月9日（第1話）／12月7日（第2話）／12月21日（第3話）／1月11日（第4話）／1月25日（第5話）／2月8日（放送を終えて）
再放送：11月16日（第1話）／12月14日（第2話）／12月28日（第3話）／1月18日（第4話）／2月1日（第5話）

- ・浦 光博 鹿児島NHK「鹿児島NHK NEWS WEB」11月24日
（鹿児島で起きた暴行事件についてのコメント）

2021年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧

センター長	広瀬 依子	国際教養学部 講師（上方芸能、伝統芸能）
所 員	浦 光博	追手門学院大学 教授
所 員	佐藤 貴之	国際教養学部 講師（日本近現代文学）
所 員	辰本 頼弘	社会学部 教授（スポーツ科学）
所 員	横田 修	社会学部 准教授（演技・演劇教育論）
客員研究員	伊藤 洋子	追手門学院大学学長アドバイザー
客員研究員	大坂 幸司	追手門学院大学校友会 理事、元（株）日本旅行 勤務
客員研究員	大谷 邦郎	グッドニュース情報発信塾 塾長、NPO 発達障害を持つ大人の会（DDAC）監事、 （元・MBS ラジオ報道部長）
客員研究員	木村 未来	国際教養学部 非常勤講師、元・読売新聞文化芸術部記者
客員研究員	瀬沼 文彰	西武文理大学兼任講師、桜美林大学非常勤講師、日本笑い学会理事
客員研究員	高垣 伸博	追手門学院大学非常勤講師、大阪府立上方演芸資料館・ワッハ上方「プロモーション委員会」事務局（プロデューサー）
客員研究員	鳶野 克己	立命館大学 文学部特任教授、日本笑い学会会長
客員研究員	福山 侑希	藍野花園病院 臨床心理士
特別顧問	坂井東洋男	追手門学院大学 学事顧問、元学長
特別顧問	西上 雅章	通天閣観光（株） 代表取締役会長、追手門学院大学 客員教授

追手門学院大学上方文化笑学センター規程

令和2年2月17日

制定

(設置)

第1条 追手門学院大学学則第58条に基づき、追手門学院大学（以下「本学」という。）に、上方文化笑学センター（以下「センター」という。）を設置する。

(目的)

第2条 センターは、本学の総合大学としての学問的蓄積を生かし、人類の誇りうる能力であり文化である笑いを対象にした、学問・文化の集積拠点となり、教育・研究活動の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 笑いを中心とした上方文化に関する情報発信
- (2) 笑いとユーモアを活用した教育プログラムの開発
- (3) 上方芸能及び笑いの文化に関する図書及び資料等の情報収集並びに提供に関する事。
- (4) 講座、講演会、シンポジウム等の開催
- (5) その他センターの運営に関する事。

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、学長の推薦により常任理事会の議を経て学長が任命する。
- 3 センター長は、センターを代表し、センターの運営を統括する。
- 4 センター長の任期は、4月1日から2年間とし、年度の途中で任命された場合は、就任した年度の翌年度の4月1日から起算して2年を経過する日までを任期とする。ただし、再任を妨げない。

(所員)

第5条 センターに、所員を置くことができる。

- 2 所員は、大学の専任教職員の中から、第2条の目的を達成するために必要な専門性を有する者を所長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は2年とし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第6条 センターに、客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、学外の有識者の中から、第2条の目的を達成するために必要と判断される者をセンター長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は1年とし、再任を妨げない。

(特別顧問)

第7条 センターに、特別顧問を置くことができる。

- 2 特別顧問は、センター長の推薦により学長が任命する。
- 3 特別顧問は、センターの事業推進についてセンター長に助言等を与える。

(事務の所管)

第8条 センターに関する事務は、学長室の所管とする。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て学長が決定する。

附 則

- 1 この規程は、2020年4月1日から施行する。
- 2 追手門学院大学笑学研究所規程（2015年9月4日制定）は、2020年3月31日をもって廃止する。

附 則

この規程は、2020年4月1日から施行する。

追手門学院大学上方文化笑学センター年報 第2号

2022年3月30日発行

発行者：追手門学院大学上方文化笑学センター
〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番地15号
TEL：072-665-5024

印刷所：協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL：075-312-4010
